有賀喜左衛門（述）・高橋明善（筆記）
「家族制度と日本社会（1954年東大講義録）」（2）

Kizaemon Aruga's Lecture Notes on "Family System and Japanese Society"
（2）

高橋 明善*
Akiyoshi TAKAHASHI

解題（続）

当時の東大社会学研究室の研究状況の中での有賀先生の位置づけを知りたいという編集委員の要望に応じて、この講義ノートを筆写した当時の私高橋の状況などを一筆したためておく。

私は、1954（昭和29）年4月に社会学科へ進学したが、当初、社会学のどの分野を専攻しようか迷っていた。3年生になると福武直先生、日高六郎先生の2つのゼミのいずれかの選択をしなければならない。福武ゼミを選んだのは農村の勉強をしたいという願いがうすうす芽生えていたからかもしれない。しかし、ゼミは農村とは無関係の外書講読であった。福武先生は農村に関する授業ももっていなかった。農学部や経済学部で授業を聞きにいったが、社会学という点ではいま一つである。当時は戦後社会学の低迷期で、授業もまとまった内容をもつものは皆無といってよかった。何を勉強してよいか分からず雲をつかむような気持ちで社会学書や社会科学書を読んでいた。貧乏学生には本を買う金もなく、コピー機もない時代だから、図書館や研究室で丹念にノートを取るという非効率な勉強しかできず、得られる情報も少なかった。何よりも組織だった勉強の方法が分からず模索し続けていた。そうした状況の中で唯一、形をもった専門授業として巡り合ったのが有賀先生の授業であった。「これはほかの授業と違う」と思いノートを取りはじめたのである。社会学や農村研究の授業というより日本文化論に近い。それでも私は何かの手掛かりを得たいと真面目に聴講しノートを取った。有賀先生の授業は分かりにくいという評判で、聴講学生もまばらだった。当時の社会学科生は30人、常時聴講者は20人もいただろうか。他学科から聴講するものはほとんどいない。しかし私には、分かりやすく面白い授業であった。

このように模索するなか、福武先生に奨められ、夏休みに出雲の株小作制度と狐もちの調査をしてレポートを提出した。株小作制度は、有賀先生が研究した東北の名子制度と同じく従属的小作制度であるが、性格が異なることが理解できた。奥出雲における農地改革後の大山林地主のむきだしの農民支配の厳しさを見て、有賀先生の恩情的家族主義的な親方子方関係の肯定的理解に疑問ももつようになったのである。福武先生の支配構造論的、民主化論的農村論に、より親近感を感じるようになったといつてよい。その親近感には、私が戦後の民主的諸変革と、平和と民主主義を目指すもっとも明るい時代の戦後教育を経験した世代であったことも影響していた。私にとっては、有賀先生が語る日本社会の民族的伝統的性格は、民主主義のためには克服すべき対象と考えられるようになっていた。

当時、助手には塚本哲人氏がいた。院生には松原治郎氏もいた。1年上には蓮見音彦氏がいた。当時の社会学研究室には、農村調査をしない者は社会学者にあらずというような雰囲気があった。農村改革なくしては、超国家主義と戦争をもたらした日本社会の民主化はあり得ないという問題意識も社会科学全体に充満していた。そうした流れの中で、輝かしい業績をあげられた福武先生の活躍と、先生の主催する農村調査が農村研究への関心を高めていった。

戦争責任を問われるなかで戦前型の社会学研究が壊滅状態に落ちいった時期があった。しかし、調査研究における現実分析を重ねていた有賀、鈴木栄太郎らの仕事はその実証性のゆえに生き残り評価を高めていた。その遺産を戦後の社会学の農村研究につなぐ役割を果たしたのは福武先生であった。先生の戦時下の中国の実証研究は、有賀・鈴木の日本農村研究の最良の成果をくみ取って、比較社会論的におこなわれたものだった。戦後、誰よりも早く疲弊した農村の復活のために福武先生が農村調査研究を開始できたのは、先生が有賀・鈴木を取り込んで農村研究の視点と方法を確立していたからだと思う。有

* 東京農工大学名誉教授

賀・鈴木を受け入れる者も批判する者も、彼らの実証性を基礎にした成果からくみ取ることなくしては先に進めなかったといつてよいのである(翻刻にあたっては編集委員会三須田善暢氏の助力を得た)。

家族制度と日本社会(承前)

有賀喜左衛門

(9月20日)

家は全体社会との関連に於いて捉えることが必要である。しかしその際具体的事実との関連に於いて捉える為には、個々の家の究明から出発しなければならない。最初から全体社会を論議することは一般論におち入り易い。今迄述べた家の形態を捕えることは重要であるが、それが如何に外部的条件によって影響されそれが内部的条件と如何に結びついて、如何に家を決定しているかを考えねばならない。

先にあげた分類で複合の家単一の家の様な分類を行ったが、その様な形態がいつれのものであろうと日本の家では直系〔嫡系〕と傍系が区別される。これは何故なのだろうか。複合の家を見ても、その場合直系親〔嫡系親〕は家を継承して行く人であり、家長との血縁者と非血縁者を含み得る。雇人は家族でないといえればそれ迄だが、それが、やはり家族であると見ればそれは、傍系親に入る。これは古い分家慣習からすれば二、三男、雇人は共に分家するものである。そして分家は本家の同族として考えられる。その際二、三男の分家と雇人の分家の間には階級的差別があったが、共に分家と考えられる意識は濃厚である。たとえば東北地方ではともに〈カマド〉というのは、このあらわれである。

単一の家の場合は雇人の様なのはあまり問題でない。これは古来非常に多い。これから単一の家が基本的であるという考え方があろう。

日本の古代について見るとこれは正倉院に残っている戸籍を通じて見得るのみであるが、そこには郷戸というものがある。しかし、大体に於いて単一の家の様なものが多い。今日の家もその伝統を持って存在している。歴史的に見てもその様なものが多かった。そこで単一の家が基礎的な家の一つであることはいえる。しかし、有賀はこれだけではなく、先に上げた分類に上げた形態はすべて基礎的と考えられる。これは日本の基礎的な家を分類したものである。

日本社会の社会的性格を持っている可能性が、すべてこの分類の中に入っている。

A 単一の家のa、bのごときもののみを基礎的な家とすると、動物の場合と同じくつまり血縁的、生物学的見方によってのみ考えるのは人間の場合にはあてはまらない。子供にも直系〔嫡系〕と傍系と分けられるのは、又、男の方に女の方に対して優位を置くというごときは血縁の原則からは説明出来ないことである。血縁の原則から相互に区別される筈はないのに同じ兄弟姉妹であっても直系〔嫡系〕と傍系に分け、直系〔嫡系〕は家の相続に関係するもの、傍系はそれからはづれるものであり、直系〔嫡系〕傍系の間に社会的な区別さえある。

新民法によりこの事情は大分変ったが、現在でも特に農村には濃厚に残っている。次に直系〔嫡系〕と傍系は同一の夫婦から出生した時は血縁的な原則によってしづられるものがあるかどうかはないといつてよい。これは歴史的に見たらいえることである。長男優先の法則が確定されたのは明治民法であった。江戸時代の武士的儒教的家族の伝統を引いたものだが、庶民の間では長子相続は決まっていた。末子相続のごときも最近まで残っていた。

中世の武家社会の相続を見るに、これは長子相続ではない。本家をつぎ一族の統すい者となる惣りようは、家長がその資格があると認めるものになったのである。更に甚しい時は子供の中に資格者がない時は子供があるにも拘らず、養子をする事さえあった。家の系譜の性質はこうして血縁の原則に規定されたものではなかった。古代には長男を嫡子にしている。そうするとこれは、長男相続の如く考えられるが武家時代の如く遺産相続のごときものではなく、分割相続の傾向が大きかった。中世時代にも分割相続はあったが、惣りようが全体を統制するという形で行われ近世武家社会になると分割部分を非常に少くしてしまっている。

これらは血縁の原則ということには合致しない。血縁を原則とすればどの子供も平等ということになる。つまり人間の家の説明は社会的にも説明せねばならない。直系〔嫡系〕と傍系の観念は家の相続系譜と結びついて成立したものである。つまり家の永続に非常に高い価値を持たせている。そして家族の生活を家が守るという目標を持っている。民法によって家族制度は廃棄されたにも拘らず何故、家が存続しているのであろうか。つまりこの問題は未だ解決されていない。

何が家族制度を維持させているかを考えなければ

ならない。家は家族の生活を守るという目標を持っているが、家を含む社会が、家族に対して生活保障をしないという所に家族制度存続の根本原因がある。日本の社会政治が歴史的に見て、このことを大きくとり上げて考え対策をたてなかったのである。こうして、家を守ることが無上の道徳と考えられることになる。こうして家に関する法律の改変だけでは家は解決されない。つまり家の問題は家だけでは解決されない。外部の社会との結びつけで考えねばならぬ。

西洋の family は結婚によって成立する。そして当事者の同棲が消滅すると共に、family は解消する。これに対し日本の家は個人とはなれても存在し得る、特殊的存在である。位ハイ、墓地、建物等が家に附属して存在し、成員が死滅しても、血縁者が管理し、適当な人を見つけて、家の系譜を継いで新しく家を存続させる。その人はもとの家族の血縁者である必要はない。もっとも血縁者がよりえらばれることはある。このことは家の系譜が近親結合によるものではないことを示す。

家の系譜は血統を示すものではない。所が家の系譜は家という存在物の存続のためにある。系図を見ると、それには家長の系統が書いてある。それには肉親の親子の關係に合致するものもある。これだけでは血統と考えられるが血縁の筋が切れた時に置かれるのは、養子である。この養子は血縁者でない場合も多い。これは家の系譜の性格を見るに重要である。

又、子供があってもそれが勘当された時など養子をする場合とか実子は不適当としてそれを分家させ養子に相続させる場合など中世の実子のうち最適のものを選ぶ場合も、家を持続させる為の努力である。正妻と妾のごとく、配偶者の社会的地位を区別するのも家族制度がそれを要求している。正妻は対等の家から、妾は以下の家の場合が多い。この区別は三子^{あとも}⁽¹⁾を決める時正妻の子が選ばれる、正妻の意味はその家の資格にふさわしい妻という意味である。妾の子供は結婚の際にも区別される。以上は家族制度が結婚における妻の位置、生まれて来る子供の位置を決めていることを示す。しかし、正妻の子がふさわしくない時は養子が三子として得られる。

つまり家の系譜は血統であるということは出来ない。これからいくらでもずれる可能性を持っている。

家制度の特殊な觀念によって形成されたものである。上流階級の場合は多妻慣行により血統を持続させて行きやすいが、しかし、それは、血統の持続の

考え方ではなく、家制度の要求によるものである。腹はかりものという思想がほんとうにあったとすれば正妻も妾も平等の位置におかれるべきである。

奈良時代の皇帝には

正妻－三親等内 妃－臣下、嬪、夫人があった。

庶民階級の場合は妾はない。後継がない時は中国の場合と比べて、血縁ということは嚴重に問題にされないから、妾は、子供を得る為のものではない。

このことから上流階級も本質は庶民階級と同じであった（社会の一般大勢から特殊なものの本質はみるべきである）。妻に子供がなくて、妾に子供がある時には子供は妻の子供として取り入れてから後を継がせたということなどから上流階級の妾は家の社会的威勢を誇るためのものであった。

家制度にとっては一定の家の嗣子になるものは実子であっても、そうでなくても問題ではない。その意味で養子が legal fiction 法的擬制とは家制度にとってはいえない。この嗣子は特殊な家制度が要求している制度的なもので生理的な子供という様なものではない。西洋の family の場合を考えると、family そのものが結婚する当事者の誓約契約によって成立する。この場合も family は集団だから個人そのものではない。デュルケムは社会的事実個人に外在してそれを強制するものであると述べているが、社会關係は社会關係を構成する個人を大きく制約するということのまづい説明と考えられる。しかし、西洋の場合は個人主義を基盤にして結びつので日本の家とことなるものが生じてくる。つまり西洋の family も、作られると個人を制約する社会集団の意味を持つが作る態度が個人主義的である。これに対して、日本にはこの様な個人主義的な態度は見られない。西洋の family と adopt された子供を son-in-law⁽²⁾ と呼びこれを son に対して、legal fiction と考える。つまり、現実には子供ではないが、法律上子供にしているという考え方がある。夫婦がともに法律的な關係において子供を扶養する關係である。夫婦と子供の關係は個人主義社会における關係があらわれている。

日本のあととり養子は日本の家制度によって性格づけられ、家をつぐ資格ということが問題で肉親でも養子でも問題ではなく養子も決して擬制ではない。この点は、実子でも必ずしも嗣子になり得ないという点にはっきりあらわれている。従って擬制という語を使う時はその意味を吟味して置かねばならない。

先に述べた如く家の系譜は血の關係の連続の觀念

ではなく家という制度上の存在物の存続の観念である。その存続をになうものとして家族がある。それは直系〔嫡系〕家族である。しかし傍系とても完全に家の存続から除外されるものではない。直系〔嫡系〕に事故がある時傍系が相続することもある。傍系は直系〔嫡系〕を中心にして経済的に従属し援助しながらまとまっている。

制度的には現実の担い手が絶滅すると、家はすぐ絶滅するのではない。人の観念の中に当分存続する。その際あまりに長い間この担い手がない状態が続くと減びてしまう。

かゝる点から日本の家の制度的な特徴が認識される。

次に家族は家制度とは別かどうか、一定の個人の集合した家族生活をになうから家と家族は一般には分り出来ない。他の家に寄食している時でも、やはり二つの家があるという現象を呈する。こうして見ると家の存在は家族生活の仕方に無関係である。

又、成員が別の生活を営み家族生活から見ると二つのものが一つの家として考えられる。このことは家の存在は制度的観念であり二世帯が一つの家、一世帯が二つの家になってあらわれる。

家族と家は危機以外には分りしない。というのはこの二つのものがはなれると家は危機にたつし、分りが長くなると家は減びてしまうのである。「封建遺制」⁽³⁾の中で、喜多野清一が家族と家制度を区別して家制度をになう一個人が存在すれば家制度は存在するというのに対しそれは家族の集団的性格から出る要求ではない。それは、家制度の場合その存続を維持する正常な形態は夫婦と子供で成り立ち、家族と家は危機以外分りしない。

喜多野は家族は夫婦結合中核として直接親族を結ぶ小結合であり、殆ど一切の民族と時代に存在する所の（そして自然的基礎を持つ故に普遍的である所の⁽⁴⁾）だからして基本的社会集団でありいわば歴史的家族諸形態の核であり、そしておそらく近代的家族といわれる小家族が裸の歴史的形態であると思われる。

自然的基礎を持つ故に普遍的であるというのは、今迄非常に多く見られている。これによればかゝるものでないのは普遍的ではないということになる。

自然的生理的集団でないということはそれが社会集団であることを示すものである。家族は社会集団である。決して生理的自然的な社会集団ではない。人間にある生理的自然的関係はいわゆる動物的自然も文化の内部的契機に転化されているところに人間的

な性格があり、そういうものは社会的意味を持つ。それは家族は歴史的社会的条件に規制するものとして知らねばならない。文明社会とことなる家族形態はいくらでも人類学でも見られるがそれらは人間の社会的条件の下における可能性の限界を示すものと考えられる。喜多野氏の裸の歴史的形態はナンセンスである。それぞれの歴史的形態に規制されて各形態は生じたものであり、決してそれが裸であるとはいえない⁽⁵⁾。一般的小家族が近代におゝいことは近代の歴史的所産であるといえるだけである。この意味で各民族の各時代にあらわれて色々な形態の家族は各民族の各時代における典型としての意味を持つ。そしてそれらは家族に内する社会的制度をあらわしている。欧米の場合も家族のあらわれる基礎として個人主義的 institution を持っている。そこでは夫婦を中心とするから夫婦関係が破たんする時は家族は崩壊しやすい。

かくて、小家族をあらゆる民族の基本的形態と考える喜多野の考え方には賛成出来ない。我々は家族が自然的基礎を持つが故に普遍的であるという見解に対しては賛成出来ない。社会的であり普遍的であることに注目し、各歴史的社会的条件に規定された家族の形態を究明しようと思うのである。それは家の系譜希望と関係する。しかし日本の家は弱い存続基盤しか持たないので、家の互助的集団を作り上げて来た⁽⁶⁾。たとえば組、同族団、親類等、家の存続の為にこれらを作り上げ逆にこれらに規制されている。

そこで家からはなれた外の集団を見て見たい。

§ 家連合と同族団

(冬学期 11 月 8 日)

村落や都市を住民の聚落と考えると外面的姿からは家の集ったものとする事が出来るが個々の家の集まりとしても都市では一向に説明にならない。農村は幾分その外面性で説明出来る。家の集りの中で家が小さな集団を媒介して存在する事を小集団において家を究明して行くことが大切である。

家の小さな集団に分析してとらえることが重要。それは村の中にいくつもある。それは家と家との結びつきだけでなく個人関係とおりまざって存在する。従って、単に家の集まりが村落だというのはその性格を追求出来ない。そこで日本では家連合を考えて見なければならない。その中でもっとも重要なものとして同族団をとり出して見る必要がある。

同族団は現在では同祖先から出た男系の血縁集団

という様に使われる。従って本家分家関係につらなる人々、同姓の人々というのが普通考えられる。しかし同姓であっても必ずしも同族ではない。かゝる解釈は非常に常識的であるが、それが通用しているから一応それを無視することは出来ない。喜多野が「封建遺制」の中で本分家を「やはり系譜関係とすべしである」といつている。「系譜とは家の出自に関するものであり、自然そこには系譜の本源とそれからの分岐である。」つまり本分家には上下主従関係をともなっても系譜関係が本質的であることをのべている。系譜の意味についてはさらに、次の如く説明している。（これは有賀に対する反駁もふくまれている）

「私見では、同族団の結合の本質は上下の身分関係又は主従関係という点に求むべきでなく、やはり系譜関係とすべきである。系譜は家の出自に関するものであり自然そこに系譜の本源とそれからの分岐である」という事実に従う上下の関係が生じこの本分〔家〕間に営まれる生活慣行に一種の主従関係を附与することは看過さるべきではないがこれも系譜関係を基礎としているものであり、この基礎に根拠をおく上下主従の関係としからざるものとを区別して考えることは同族結合の本質を理解するのに重要である。」

1⁽⁷⁾、上下主従関係は第二次的なもの 2、系譜関係と主従関係は区別せねばならぬという二つの点がある。

②の如く区別しなければならないので①の論点からどうして二つのものが結びつくかを説明されなければならない。

系譜⁽⁸⁾ 関係の中に結びつくものがなければ上下関係と結びつき得ないであろう。

喜多野は「本分家内に出自関係を認知し合うことによって結ぶ関係であり……その相互認知の上に立って一定の位置にたって結合する。こうして家の系譜関係の相互認知が本分家の関係の成立である。

しかし、系譜出自はちっとも説明されない。喜多野は本家の権限は系譜の本源であるという事実に基づくといっている。そこで系譜は本源と分岐したものの関係であり、本源であるが故に権限があるという点は理解されない。それが喜多野系譜関係は本来的に主従関係でないというので、平等でなければならないということになる。

本家は本源でも衰退したり精神的指導地位を失って権限をなくすことは常に見られる。それで喜多野が本家であるという時それは血縁をさすと考えられ

るが何故、血縁によって本家の権限を説明することが出来るか。かゝる血縁の原則によって割切ろうとする時同じ親から生まれたのだから平等でなければならない。ところが喜多野は本源の持つ伝統的權威⁽⁹⁾ に対する承服であるという。我々の間で一方が他の權威を認めることがどうして生ずるかを考えて見なければならない。兄が權威があるということは社会的条件を考えねばならず単に血縁によっては理解されない。

外に本家から分家が別れるのも社会的慣行でありその様な社会的慣行から遊りして説明することは正しくない。たとえば財産を分けてもらわない時は、分家意識が非常にうすい。

分家財産をもらっても居住地がはなれている時は、臨時の関係はあっても日常の関係がないので少くとも代が替ると、生活関係は急になくなり本分家の意識もなくなってしまう。もし、血縁の原則が本分家を規定するなら、血縁のつづき⁽¹⁰⁾ 限り、本家分家関係はつづかねばならないのである。

本家⁽¹¹⁾ 分家が同じ部落にいる時は両者の関係は日常的に密接である。本家が分家に対して、経済的に頼る時など分家を本家は援助する。たゞ物質的な面だけでなく精神的に指導的立場をとっている場合など分家の本家への依存は大きい。この様に本家が分家に対して有力に作用する時は本家の權威が生ずる。本分家の相互認知があるのは二つの家が生活関係を持つことによるものである。従って⁽¹²⁾ 系譜の承認は、生活条件から生まれるのである。

本家と分家初代を見る。本家に生まれた二、三男の生活を助けて独立させ又同時に本家を助けさせるという関係が生ずる。本家が分家より常に有力ではないが、一般に有力なので依然として權威はたもてる。そこで本家である故に伝統的權威を持つということはいえない。一度その家が本家であるという事実を持つことは有力無力では決定されない同族団の内部構造があるので本家伝承が消えない限り、やはり本家を認める心情は消えない。その意味で伝統的である。しかし、やはりそれを支持する生活条件がなければかゝるものは存在し得なかったであろう。単に本家というだけでは存在することは出来ない。

こうして本分家を何か規制する生活の条件が必要である。

喜多野氏の本分家の系譜を考えることは同族団を知るには非常に大切である。家の系譜は一つの家が存続して行く為に必要となって来る。本分家関係が

存在することは二つ以上の家が特殊な関係を持つことを示す。それは出自の関係を示すが、数代をへて血の関係婚姻関係がなくても本分家の関係は一定の条件では簡単には変化しない。一定の条件とは密接な生活関係を示す。

大きな富裕な農家のある時は、同族団も大きい。小さな家の時は必然的に同集落の生活関係が密接なことに限られる。そこで本分家関係を支持する最大のものは同じ村落に居住することである。

本分家関係がつづいたことはどの代でも常に本分家関係を持っていたことにその意義がある。

分家にとって出自の問題が非常に重要である。本分関係は決して血縁の原則に基づくものではない。一般に家は分家したら新しい家はその家としての系譜を連続して行かねばならない。この本分の系譜が結局家の系譜と結びついたものであるのである。しかし家の系譜は血縁によって支持されるが、本来血縁とは無関係なものである。

(11月22日)

封建社会が同族団を生み出したものでなければ同族団は本質において封建的とはいえない。問題は封建社会によってどのような制約を受けて来たかということである。

封建遺制中で喜多野は上下関係主従関係を根拠にする本分家と系譜関係を根拠にするものではあるがしからざる系譜関係と区別せねばならないという。

血縁の本分家と非血縁の本分家を区別することは意味のないことではない。しかし上述の喜多野の区別はどういう意味か。

血縁本分家でも主従関係、平等関係、がある。この様なものが現実にあることはどういうわけか。

東北の隸農と名子の違いは生活条件の違いによるもの。

岩手県の侍濱、白前には地頭、菅原家がある。ここでは血縁分家でも主従的關係になる。同じ血縁分家でも本分家の間に婚姻関係などが起らぬ時は階級的区別が厳然としてあらわれる。

雇人分家と、上のものとどんな違いがあるかを現実を捨象して定義するのは正しくない。分家が生ずる時の条件その後の条件によってどう規定されるか問題。

平安時代末期武士がぼっ興し、自己の強奪した土地を獲保する為に本家（本所）領家の莊園という名目を得た、ここに本家の初の言葉であるがそこでは血縁は問題ではない。

頼み本家、わらじぬぎのことはこれに通ずるものである。従って農村の現在の小さな習慣を見て日本全体の本分家を規定することは正しくない。それが、歴史的な本家分家の特殊な場合ではないかという様に見て行かねばならない。少し前まで本分家の間に階層的区別が大きい場合が多い。婚姻関係がなかったり、総本家より嫁を出すことはあってももらうことはなかったということもある。しかし小百姓の間では階層的区別がない場合が多い。この様に主従的差別のあるものとならないものの生まれる条件を考えて見なくてはならぬ。平等の場合は本分家の系譜関係として考えられるが、単なる親族関係として考えられるかが問題である。雇人分家と血縁分家の場合の⁽¹³⁾ 習慣を見る時、殆ど同じ様である場合が多い。一般に血縁と雇人の社会的地位の差異が考えられるのみである。しかし侍濱では、本家の地位が強大で又雇人分家の数が少い時には、血縁分家と雇人分家のとの間には殆ど差異はない。

系譜の意味

A'なる家がありそれはAの系譜にあるものとす。その系譜であらわされる本分家は何代たっても一定の条件が働いていれば継続する。そのことは本分家の相互認知だけではなくその家の存在する村落全体が承認している。封建時代において、日本では国際的のみならず国内的にも封鎖性が大きであったので、家の数が限定され、分家しても本百姓となれず本百姓に従属して、水のみということになる。しかしそれでも家はふえて行く。A'が本家Aの家族によって、許されねばならない。又その際村の承認も得なければならぬ。

喜多野は分家は本家家長権の分割であるという。本家の家産が分割が行われることを見れば、家長権の分割とも見えそうである。新しい家が出来た時には家長が必要であり、本家の家長によって、家長が任命されたのであると見るのが家長権の分割より正しい。つまり本家の家長が家を作り家長を任命し、その家の家産を作る。

家の系譜という概念に基礎づけられ、その系譜は最初から、本家の支配的な地位を認めて行くという性格を持つことになる。喜多野は相互認知ということ云うが、それは本家の權威を認めることになり、權威は生活条件によって生ずるものであれ、その条件がことなれば、認め方もことなる。

このことは本家と同じ家を作りあげるのは本家、それを認めるのが分家、そして村落が認めて本分家

関係が生ずる。

生活関係によって本分家関係は一定の考え方によって成立する。血縁的な本分家関係が成立するのは、本家を中心とする生活関係を結ぶことが、本家分家関係の設定となる。

日常生活における協力関係がないと本分家関係は結びにくいのが農村における場合である。本家の生活権が強い時は分家の範囲は、同部落から他部落へとひろまる。武士集団の本分家は、農家と比べて非常にひろかった。

農村の本末関係の設定の為には同じ村に住むことが重要。分家成立当初には本家の援助を受けることが多い。新しい分家程本家との関係は強い。

本家分家間の関係がなくなることは常にある。従って、本分家関係は血縁であるから強いとはいえない。血縁そのものにこの関係を強化する力はない。従って非血縁分家が血縁分家よりも関係がうすいということはない。冠婚葬祭災害による互助関係が neighbourhood の関係を結ばせる基本的な関係である。生活関係こそは本分家関係を結ばせるものである。極端な場合、家が遠く離れている時は本分家関係はもはや結ばれない。本分家を結ばせる関係を色々な例から考えて見て本分家とは如何なるものであるかを考えて行かねばならない。この問題は農村だけでは解決出来ないものである。

同族団

かゝる種々の形態をもった本分家は如何なる機能をもつかを考えて見る。同族団と氏姓時代の氏との違い、氏は同族団よりもはるかに大きい集団であり単に血縁的集団ではなく古代的主従関係の集団である。従ってここで考える同族団は氏とはことなるものである。

当時は氏の上の同族団、その下にも多くの同族団があり全体として氏の上の集団に所属するもので、中臣氏の下に中臣部が存在する。同族団はこの部にあたるものであらうと考えられる。

同族団は非常に多くのものが同族団の神をもっている。それは、同族団の鎮守つまり守護神である。その場合、昔は本家を中心になった形が多く後には同族団に属する家が順番に祀った。本家が権威をもって同族団の統制を行い得る時は決まって本家中心の神となる。それと別に各家が、色々な神を祀る祭壇を持つ。それは家の守護神の考え方が強い。それはエビス、大黒、荒神様、伊勢神宮など多くを祀る。その際その神が特別の利益をもつことも考えられる

が、家という統一したものとして祀っている。従って祀りをするのは家長、又は⁽¹⁴⁾が行う。つまりそれは家の行事として存在するものであり個人個人の行事として行われるものではない。そこで神も又家の神として存在することになる。分家が行われる時にもやはり本家で祀った神が、分家の神となる。

「かぎをわけろ」「かまどをわけろ」なる言葉があるが、かぎをわけろとはいろいろのかぎをわけることであり、かまども勿論いろいろのことである。ところでこのいろいろは祀りをする所であった。そこでこの様にして分けられた分家は同族の祀る神を祀る許可を得ることになる。本家に力がある時は祭司を司るのは本家であり、その力がなくなった時は司祭は順番制になる。

これは当時の社会組織を反映している。

各家が家の守護神を持ち全体がまとまって又同族団の守護神を持つということは各家長がいて、同族団全体の家長がある。

この様な構成が全社会構造に投影する。

(12月6日)

本分家関係は家と家との関係としてのみ存在するとのみ考えるのは正しくない。

その外⁽¹⁵⁾にその家長と家長との結びつき以外に個人的な関係も考えねばならぬ。たとえば分家当事者は本家の家長との間にある性格を持った関係がある。本家に後に分家する人がいる限り、本家の家族にすぎずそこでの本家の家長との関係は決して家と家との関係ではない。ヤトイ人分家を考えて見る。ヤトイ人と主人との関係を見るとヤトイ人は長期の関係に入ったものである。

主人とヤトイ人との結ばれた関係は武家時代等前時代の多くの制約を受けているので決して、近代的関係ではない。この場合下から上へと制約の関係を持っている。

これは近代に入っても残存している。ヤトイ人は家族と考えられる。十歳前後で主人の家に入る。そして主人との間に親方子方的な関係を結ぶ。(有賀はこれがある一定の性格をもった主従関係と規定)つまりここに個人的な関係によって主従関係が成立する。ここに後にヤトイ人分家が出た時にもつ生活の根源かゝる個人関係にもっている。

ヤトイ人が分家して家をもつと、その家族は主人の家族を主人と見る。

かくて個人関係か家の関係かははっきり、けじめがつかない様な関係となる。かゝる関係は封建社会

以前から存在するものであるからこれを以て封建的だとそのまゝはいいい切れぬ。しかし今日残存しているものは封建社会に規制されたものを多分に持つ。

ここで述べたのは非血縁分家の場合であるが次に血縁分家（特に二、三男の）の場合について考える。

これらの二、三男は家長の家族として生まれたものであることがヤトイ人の場合とことなる。本分家の関係は二、三男が父の家に同居している時に既に決定されている。この場合は、傍系親として考えられている。（有賀は血縁以外の家族のみとめられるすべてを傍系親であると考えた。したがって上のヤトイ人も非血縁傍系親と考える。この場合は一般的な使い方による）

直系〔嫡系〕親、傍系親の区別は血の平等からは正しくないから、これらは家の系譜からうまれた概念である。二、三男から分家した家族は本家の下に立つ。従って本分家関係が主従関係として考えられる時三子と二、三男の関係が主従関係であったと考えてよい。すべての場合が主従関係であるというのではないが、両者の社会的⁽¹⁶⁾地位を差別する風習は歴史上非常に広汎に見られる。

（家族として同じ家に属している時既に主従関係として見られていた）

主従関係と血縁関係とを別々に見る見方は非常に広く行われていた。血縁関係は決して主従関係を結ぶ障害にはならない。もっとも姻戚本分家、長、二、三男間に常に主従関係が結ばれるものとは考えられない。

しかし姻戚関係のごときもっとも平等の血縁関係を生じやすいものも、歴史を逆上る程主従関係となっている場合がある。

血縁関係が主従関係に規定されて、一種の上下関係になっていることは非常に多い。そして主従関係を結ぶ個人が階級的な関係を生じている。

2つの関係が結びつくのは上層の家が多い。そこでは上層の家が非常に高くなる。それらが政治構造の中心（皇室、大名等）となっているからである。そこでは家族の中でも主従関係が鮮明に出ている。庶民関係とはその現出がはっきりしていない。上層階級では、家族として同居している時に主従関係が生じている。そして分家する時には、財物を分けあたえ、分家は全く本家に依存する。そして両家の間には本末関係が生ずるが、分家の家長と本家の家長との間には主従関係があり、この個人関係は単なる個人関係にとゞまらずたゞちに家の関係として成立

した。換言すれば家長は家から自由ではない。彼は家から強く拘束されている。家父長制家族は恣意的家長を想像させるが日本の場合ではその様なものではない。彼は家産を持ち家の連続を最高の命題とし、それに結びついて家名等の道徳的なもののむすびついた集団としての家からの拘束を受けている。さらに家が政治グループの中心である時はさらに、政治グループからの拘束もある。こうして西洋の家父長とは非常にことになって来る。日本では、西洋とことなり非常に個人が弱められている。その一つの現象形態として個人関係と家の関係とが錯綜したものである。本分家間の関係は、色々の条件によってことなる。

以上には階級差のある場合についてのべたが次に階級差のないものについてのべる⁽¹⁷⁾。かゝるものは新しい時代になるほど一般的になって来ており、本分家の意識も非常に弛緩している。しかしこれは近代になってはじめてあらわれたものではない。

江戸時代小農の分家は、自分で分家を出すか、地主に頼んで、奉公させてもらいヤトイ人分家を出さしてもらう。小農が自分で分家を出しても僅少の財産しか出せないで、有力家に働きに行き出入りの関係を結ぶ。住みこまないで働きにかよう出入りでも定雇（一軒の家にきまっていてその家の厄介を深く蒙る場合）とか、種々の家に行く場合とか種々ある。定雇の場合は関係が密になって来て、子供は住み込んで、ヤトイ人分家をさしてもらったりする。小農の場合はかくて本家との関係よりも、有力家との関係が強くなっている。小農の分家が独立しても、本家との階級差は非常に少い。かゝる分家は元禄以降特に都市近郊には非常におゝい。しかしかゝる場合でも直系〔嫡系〕と傍系との差別感は大きかった。そして上層階層の様にはげしくはないが、生活上からは差別はなくても系譜観念によって規定された家格差が生ずる⁽¹⁸⁾。ここでは本家伝承が非常に重視されているのである。このことは家制度において直系〔嫡系〕と傍系の区別が基礎的に働いていることによる。かくてこの直系〔嫡系〕と傍系の区別が家制度研究にとって必須のものとなる。出自の意識がある時に本分、本末家がいわれる。この意識を忌避する時には、本分、本末家であることを否定する。この様に忌避されるのは種々の生活上の利害関係から生じたものである。平等関係にあるということは決して、出自の意識を妨げ⁽¹⁹⁾るものではない。特定の出自を否定しようとはしているかもしれないが、新しい出自を求めているのである。これは一般

に出自が不明になると、新しい出自を設定しようとするこゝろみはしばしば行われた。又本家争いのごときもある。

かゝるものは日本の政治、社会構造の究明には必須のものである。

出自は近世以後、血縁分家のみを出自と考える様になって来ている。これは庶民階級においてもはっきり説明出来る。つまり血縁関係が基本であるということと結びついている。

(12月13日)

出自は家の系譜という特殊な制度的概念にうらづけられている。出自が血縁関係を基本とするという様にのみ考えることは出来ない。そういう考え方のもっともいい例としては、源⁽²⁰⁾平氏の如き特殊の姓に結びつけようというごときそれである。これは上層階級を除外しても庶民の中の上位のものはやはりその様に考えて自分の家にそういう系譜があることを誇ったりする。

かゝる考え方は全体の政治構造と関連する。

庶民階級の最下層はどうであろうか。それは分家の場合にははっきり出る。ヤトイ人分家奉公人分家が主家と本末を称するごときはヤトイ人分家の出自の根源が主家にあるという考え方でその際主家の姓を与えられることも結びついてでて来るのははっきりした考え方である。出入りの関係を通じて本末を称するのと同じ例である。此の場合姓を与えることのない場合もある。(賜姓)

つまり異姓の関係でも本末家の関係を設定する場合もある。本末の系譜を設定することと賜姓は結びつくことが多い。それは同姓を与えることも異姓を与えることもあるがとにかく与えることが問題。(賜姓は奈良時代に生じた) こうして親方、子方関係が生じて来る。

特に明瞭なのはヤトイ人分家のごときである。これは最初結びつく時に既にはっきり出ている。血縁の場合、本分家の階級差が少いとその関係は曖昧である。階級差の大きい時は逆である。その例は直系〔嫡系〕の家と傍系の家の区別ごときである。時には兄弟同居している時にも差別が生ずることがある。(親方子方の言葉は個人的な言葉であるがやはり本分家なる家の関係とは切れがたく結びつく。)

頼み本家の慣習の時もやはりはっきり主従的な意味が出る。これも最初は個人関係だがやがてすぐ家の関係が強く表面に出る。こうして個人の評価が家の評価に影響される。しかし個人の評価はすべてが

家の評価によって決定されるというのではない。

親方子方関係

親方子方、親分子分、親子、なる関係がある。

近世以後の村では家の関係は都市と比べて比較的固定している。その様な村の生活の中で上述の親方子方などの慣行は、一般には個人の通過の儀式を通じてあらわれている。つうか儀式とは人間の成長の過程において経なければならぬ色々の儀式、たとえばなづけ、成人式、結婚のごときに親をもうける風習がある。これをかり親というふうに規定する人もある。これを借り親だと規定する人もある。勿論その様なものもあろうが別の場合もある。それは親方どりである。そこには指導者として一生を決めてもらうという様な意味がある。

元服親、ナツケ親、カネオヤ、結婚親

ナツケについていえばその古い意味は支配者が相手を支配するあらわれとしてナツケが行われるものである。

そして実際の親は子供の一生の保護者を求めて保護をたのみ、保護者は名をつける。オサナ名、大人名をつけるのともにナツケオヤ。結婚のトキ新夫婦の生活を支配保護するオヤもたのまれる。

もしつうか儀式の各時機に選ばれるオヤは常に同じであった場合が多い。しかし家と家との関係は何時も同じではない。しかしたとえば農地改革のごとき又より小さな変化によってオヤとして保護出来なくなる時もある。こうしてオヤカタドリの関係が家の関係によって変化することもあった。このことは階級差がなくなったらオヤカタ子カタの関係がなくなることを示すものではなからうか。

もっとも完全に残るのではなくても形式的に残っていることがある。そこでは本来の意味主従どりの意味はなくなり、かりおやのごとき意味が表面に出る。問題はなぜこの様な関係が形式的にせよ残存しているのであろうか。オヤということばは非常に複雑である。すべてがparentの意味ではない。このことをはっきり認識しない為親方をparentのfictionと考えるごときがある。

カリオヤは非常に形式的になっている。階級差がない時に誰が、オヤになるかという血縁の長老などになる。現在は個人関係としてのエボシオヤ元服オヤをえらぶごとき風習は非常に少くなっている。四、五年前ツシマにはいくらか残っていた。その場合階級差のある場合とない場合とがあった。両者を

比較すると前者の場合のオヤの意味が第一次的なものと考えられる。後者では長老、指導者先輩の意味がつよい。しかしやはりオヤなる言葉が残っているので前のものの変形したものと考えられる。

(要約) オヤカタどりの二形態がある

(1) 階級差のある家の関係

(2) 階級差のない家の関係

(2) は (1) の変形したものであるが残存形態ではない。家の関係で (1) があらわれたり (2) があらわれたりする。

そこでは地分け(割替)が行われ、一般の百姓は平均化された経営を行っている。他に地方給人がいて知行をもっていて、前者では平等なのに対し、ここではヒエラルキーが出来ている。ヒエラルキーの出来ている給人領の中では元服が厳重に行われている。

階級差のない場合はオヤの意味ははっきりことなりカリオヤとなっている。この二つの形態はかなり古くからあったと思われる。階級差のある場合のオヤが典型的な意味を持つ。

家の関係が一定の状態条件のもとで生ずる時、個人関係はすぐ家の関係と結びつく。そこで家の動きが少い時個人関係は家の関係に制約される。そこで本家のあととりが、他の家の子供の名付、元服結婚オヤとなる。

家族の成員となることは自然関係ではなく、家の関係家の生活条件に基づくものである。それ故に直系[嫡系]と傍系の区別が生じたりする。

こうして直系[嫡系]親、傍系親が生ずる。ここでは個人関係が家の関係でいどられている。つまり最初から家の関係として分家する。

たのみ本家の場合は最初は個人関係として結ばれるが小さな村では生活上密接な関係にあるのでたちまち家の関係に入っていく。

都市の場合不動産の関係のない場合は家関係と結びつかぬ場合も多い。(バクトの間のごとき)しかし商工者のごとく不動産の関係のある場合には、家の関係はかなり濃厚に出て来る。

維新以降の資本主義が発達して企業形態が発達した時、家の関係は次第に影をひそめて来ている。明治～昭和初期の資本主義の発達にともなって企業体と家とうらはらの関係になっていたのがしだいに分りしていった。最初は企業体の中に家を取り入れて、近くに家をすませたりして本家分家的考え方と結びついて来る。そして公私混合の状態に入ってくる。これは特に企業体の小さい時にあてはまる。企業体

が大きくなるにつれて個人を企業体にとり入れるに家族としてとり入れなくても従業員の形でとり入れればよくなり居所など心配しなくてもよくなって来る。そこで職場の組織から一種のオヤカタコカタ関係をもっても家の関係とは結びつかない。ところがやはり家の関係を保護する組織も残っていた。日本の財閥などでは支店長以上ぐらひは、本家に伺候して羽織をもらったりして家の関係を強くする。持株会社も中心には同族会社が存在していた。これは家の関係の上に会社組織を構築していた。株式会社は Gesellschaft といわれるが日本の場合では簡単にそういえない。

日本人の個人の考え方が非常に家に制約された考え方を持っていたことが以上の主な原因となっている。

オヤブン・コブンの関係が家の関係と強く結びつくのは本家末家の典型的な場合にしめされる⁽²¹⁾。

本家は末家(ヤトイ人分家タノミ本家もたのむ)を強く支配する。そして末家はそれに依存する。この形態を維持する為に種々のツウカ儀式が行われる。

個人の重要な時機がその一生にとって重要な時でありその時にオヤカタドリを行う。(就職の心配、結婚の心配などをしてくれる)

オヤブンコブンの関係が家の関係と強く結びつかぬ時⁽²²⁾

これは近隣に住んでいない場合に生ずる。

本末家の家連合(同族団)は家の存立に影響する利害関係が関係する。つまり家に大きく生活を負担せしめようとしている生活条件がかかる家連合を作らしめたのである⁽²³⁾。本家は自己の力を獲得し、その基礎をケンゴにする。末家は本家に依存する。明治以後この関係はかなり弛緩している。しかし、しばしば政治的単位となる場合が多いのは利害関係によって結びついているからでありこの意味でも血縁関係が基礎とはいえない。

オヤブンコブンの支配と保護の関係も本末家の関係の場合と同じである⁽²⁴⁾。

オヤブンは正邪をこえて子分を支配し保護する。子分も正邪を越えてオヤブんに奉仕し、支持する。オヤブンの支配は絶対である。それは一代では終らず無限の負目となる。(ルースベネディクト菊と刀)、そこには日本文化特有の上位優先がある。これは私党的派閥に結果し西洋のごとく public となりにくい。そしてしばしば家の利害と結びつくので同族団として成立する時も一種の私党的派閥となる。

§ 主従関係と家制度

日本人のもっていた考え方社会組織の仕方が日本の政治制度の中にも浸透している。そこでもっとも基礎的なものとしてこの問題を取りあげる。

主従関係は普通封建的であるという考え方が強い。しかしそれは単に封建的だといえるのであろうか。封建的という言葉は武家社会の支配的な時代に妥当せしめる場合と、明治絶対主義時代、奈良時代をそれに含める場合などもある。

主従関係は前封建時代にもあるし、近代においても存在するのであるからそれをさして一口に封建的とはいえない。

一般に主従関係を封建遺制としてとらえられるが武家社会の主従関係と全く同じものであるということはありません。新しい時代の限定を受けているのである。今迄述べた如く家は如何なる時代においても家組織のうちで規定されていることをしらねばならない。

社会関係を見て行くと大きな集団が小さな集団をつんでいる場合が多いが小集団は必ずしも大きな集団によって一方的に規定されているということはいえない。その様な小集団でも、特殊であると考えられるものでも全体の政治構造を成立させて行く為には重要な部分であると考えねばならぬ。大きな集団の中の小さな部分は、一般的なものを特殊な条件によって特殊化して存在している、逆に特殊な条件を通して一般的なものが規定しているということはいえる。つまり相互規定の形で見なければならない。(もっとも大きいものが力が強いことはいえる)

社会関係における相互規定は二つの場合に分けられる。

民族文化圏の内部に対する関係と外部に対する関係における相互規定である。

家の問題でもかゝることはある。日本内部の個々の家が日本社会の家を相互規定している。又後の新しい家族制度の輸入とそれと旧家族制度との相互規定。

しかし民族文化圏をことにすると社会的な性格が強いもの同士で相互規定が行われるのでどちらかがその性格を改めねばならない。内部の場合は同じ社会的基盤における生活条件のちがいにより A が B になったり B が A になったりする相互規定がある⁽²⁵⁾。

各民族はかゝる相互規定を過去から未来へと営んで行く。

先述の政治構造が内部の家の性格を規定して行くのも非常に複雑であると考えられる。

日本の家制度の変化を考える時、その様な相互規定のもとに現在の家に発展して来たことを見なければならない。ここで先づ内部の相互規定を見ることにする。

家という小さな集団は微力なる故に社会的因が小さいということはいえない。政治組織の最深部にそれが作用していることを見ぬかねばならぬ。

最初に家が政治組織に大きく作用している側面を見て行くことにする。

家格は日本の家の特徴である。家格を決める因は政治構造である。全体社会の政治組織に参加する階層別によって決定される。

公家、武家、社家、寺家はその例である。しかしその場合単に家そのものがその様な位置をもったと考えてはならない。家を代表とする家長のもつ社会的地位に結びついてはじめて、生じて来るものである。家の社会的地位は家長によって作られるが又、家長も又家によって規定される。政治組織に参加するものは個人であるが個人も又家によって規定される。かくて家族の評価は政治社会によってもっともあらわれて来る。

政治社会は(小村落同族)から、国全体に及ぶ広い意味をもつものとする。中世武家社会を考えてみる。主従関係を結ぶ場合従者から主人に対する奉公の代償として恩給が与えられた。これは勿論相互給付関係である。そこで主従関係を結ぶことはかゝる相互給付関係を予想している。

中世の給付は、地方知行(土地)をもらうことを意味する。知行は大体名主までである。中世では戦の時に家来をつれて労役を提供するのが奉公であり普通は農業、商業、手工業などに従事していた(兵農未分り)。この関係は一応個人的関係であるが、それぞれの個人はそれぞれの家の代表者であり個人間の関係は家の間の関係となる。そこで家と個人の関係を分りすることが出来なくなる。

主従関係が純粹に個人的とすれば、子供は改めて契約しない限り主従関係には入らないはずであるが、事實はそうではない。子供は元服の時領主から元服名と役をもらう(官途につく)そのために加冠状、官途状をもらう。これらのことは家の格式によってさだまっている。この時に父の死後それを受けつぐことが予定されており、それがかゝる儀式によって認知して行くのである。かゝることは主従から与えられた知行が家産としての性格をもっていたこ

とを意味する。かゝる元服式は近世になると非常に簡単になって行く。

ともかく個人の評価は家格によって定まって来るのである。

中世近世の封建社会を通して見られることは知行の意味に共通点があったことである。近世は土地ではなく蔵米知行であった。しかし両者共に家と結びついていた。そしてそれに対して奉公の誠を作すのである。近世と中世を比較して見る時、前者は蔵米知行後者は地方知行と大きな差異である。

知行は領主から受けたものであり土地の所有者は領主であり、従者は用役を許されたにすぎない。

近世においては中間の土地支配者がなくなり、領主と農民⁽²⁶⁾は直接的関係にあることにあった。しかし、そこに見られる封建的所有権の性格は中世の地方知行をよくしらないと判らない。地方知行は世襲的(家の系譜を辿って財産制度が行われること)であり当然知行は家産であるという考え方が出て来る。知行は家長自身の財産ではなく単に管理するにすぎない。家長によって自由に処分出来なかったことが明白にそのことをしめしている。

百姓の封建的な所有の形は名請(御高請)である。それは百姓の名において領主の御高を受けたものである。これは中世の領主と給人の間の知行の給付の関係に似ている。

勿論両者は階級的にはちがうが所有の形式においては非常に似てゐる。名請の土地は江戸時代を通して、売買は禁止されていた。

(もっとも実質的には質入れなどの形で売買された)

ここには土地が家産的なものと考えられていた。

明治維新後流入された所有権はこれに対して個人的な所有権である。名請は家産であり個人主義的な地盤によって生じたものではなく封建社会では個人が自由に処分することも出来なかった。

資本主義的個人主義的な所有権が流入されたことは、社会現象に方向づけを与えたことと考えられる。しかし方向づけを与えられてもそれを阻止する要因が存在することは明らかである。

主従関係を通して生ずる知行名請の封建的所有権の特質は以上の如く家産としての特質をもつことである。つまり、主従関係が家によって制約されていたことを示す。逆に主従関係によって家の家格が規定されて来る。一コミュニティ内の一主従関係の集団であれば家格によって生活関係が結ばれていたことになる。

武士団の基本的関係は同じ政治利害をもつコミュニティに生活する人々の関係である。それは一族として考えられる。それは総領を中心として庶子、郎従が存在する。庶子、郎従に対する所領の分割に対する統制権を総領がもっていた。これは御家人の一族である。

幕府と御家人の関係は、その一族に対しては総領に責任をもたし、貢租賦課も総領に責任をもたした。つまり、政治的統治のために総領は存在した。

総領の統制権を強くして家産の分散をさけるのである。かゝる点から庶子の家は、総領と主従関係に入ることは当然のことである。

これらの一族が一つのコミュニティに住んでいることは、武士団が大きくなると不可能となり村外分家が行われて来る。家格評価はかゝる政治組織を通じて行われて来る。基本的には一つのコミュニティにおける一つの家をめぐる家連合における主従関係が家の格式を定めて来る。

§ 義理・人情、公と私の社会構造

(1月31日)

義理と人情にからまれた社会構造、政治構造を究明していく。

小さなコミュニティの上に大きな政治構造があるので主従関係が何階層かにわたって成立している。このことは如何なる意味をもつか。もち論中世と近世の主従関係はかなり違う。

中世では武士は専門武士ではなかった。近世になると士農工商の職能的身分階層専門武士が形成された。武士階級の中でもその他の中でもいくつかの階層がある。それらの間の相互関係を義理と人情によってときあかして見ようとする。

義理人情は封建的であると考えられて来たが、このことはあやまりである。事実これは武家社会と強く結びついたものであることは疑いない。

しかし、日本社会をより深く究明する為にはこれだけでは不十分である。何時頃から義理人情が発生したか。

江戸時代の武士は、義理を尊び、庶民は利を追うと武士は考えた。中国における儒教の言葉を形式的に受けついだものである。

表面的には中国と日本の義理は同じ様であるが、日本の義理は階級の中に織りこまれてちがった内容をもっている。

江戸時代の武士が自己の立場を義理に結びつけて正当化しようとしたのは政治的な独裁的地位を承認

させようとしたのに基く。つまり重要なのは義理の内容を社会構造と結びつけて理解せねばならない。

義理の用いられ方

主従関係親子関係における義理は庶民生活にとっても生活規範である。従ってこれは武士と庶民を区別するものではなく、日本人の共通性を示す特性である。

今までの義理の解決は儒教的解釈によってわざわいされていた。社会的にどの様な意味をもったかはこれでは不十分である。

子弟、親分子分、等を上のものと合わせて上下の関係の範疇に入る義理と云う。これは封建社会の特性を集中的に反映する。その外に個人対個人の関係にとどまらず多人数の関係にいたる平等的関係の範疇に入る義理がある。

（例）西鶴の武家義理物語

死なば同じ波枕で荒木村重の家臣神崎・森岡の物語
これは同僚間の義理に関するものである。日常生活のつきあいにおいて一定の生活規範を義理と称した。

庶民生活においても、家と家との間に定められた義務を果すことを義理を果すというのである。

義理のある関係

冠婚葬祭、家屋の新築改築、災害の互助関係、本分家、親分子分間の歳暮中元、年始礼（地主小作間にもある）、親戚間の贈答関係、農耕の場合におけるゆい。

婚礼そのものを義理と称する所もある。（義理に行く。義理が出来たから義理に行く。）

ギリクガイ。クガイ…つき合いを意味する。クガイを義理とする意。

交際の関係の義務を義理ということは非常に多い。

福知山 行くべき時に行かぬと不義をした。

津山 義理で行く

しの⁽²⁷⁾ 葬式の義理。婚礼の義理に行く。

一般に約束を果すことを義理をつくる。

仁義…やくざにかざらぬ

福岡県三池郡 つき合い関係の義務を果すこと。

米子…葬式や婚礼に行くことを仁義に行く。（積極的）

義理に行く。（消極的）

佐渡…葬式の場合の親戚以外のかい葬者をくがいという。

以上の使い方は大都市においてもいくらでも見ら

れる。

そこには上下的なものと平等対等的なものがあり両者が複雑にまじりあっている。それらをすべて封建的とはいえない。

日本人の生活のいろいろな面に義理が結びついていった。

葬式の場合 特定の家の葬式の場合その家との平素の関係に従って葬式を行って来た。そこには葬式組が存在する。それはある特定の家によってきまっているわけである。その組織は村の生活条件によっていろいろあるので一概にはいえないが、ある特定の家の属する層によって葬式の大きさは決定される。

葬の援助に参加しない人々は香典を持って行く。この贈与の多い少いはその家の生活関係の広汎、親疎を示すものである。

かゝる香典手伝いは義理という観念を通して、出たものである。

一軒の家のもつ生活関係について色々の義理の関係があり、それが各家にある為に非常に複雑であった。これが村落共同体を支持するものであったし又村落共同体がこれを支持するものであった。

資本制経済の発展と共に以上の関係は表面的には変化した。しかし、たとえば財閥構造の骨かくをなしているし、同族会社、持株会社の性格を色こくぬりあげている。もち論官僚組織、大企業が発展し、家関係の上に社会構造を作りあげている昔の状態から急速にはなれつゝある。徳川時代でも家を中心とする（家と家と結びつく）主従関係が、政治構造の骨核をなしていた。こうして幕府組織全体が家中と考えられていた。日本の家制度がかゝる関係を成立させる中心となっていた。明治維新以降の社会構造の発達の中でもっとも特徴的なことは家制度の制約からはなれていったことである。徳川時代は小規模の組織だったから制約されたともいいうるだろうが、もっと基本的に性格的に制約されているということがいえよう。

宮中と政治、天皇と官僚機構が分りされはするが家制度の強い制約が完全にふり切れたとはいえない。形態的にはふり切れても、性格的に不可能。従って、公的でない私的關係には家関係として成立するものが多い。そしてこの私的關係には公的關係が反映して下のものが上のものに義理を感じたりする。又公私混交が生じて来ることもある。

公的關係が私的關係を規定することが非常に多かった。

企業体において従業者が死ぬと香典が出るが、私的関係としてでなく彼の従事していた職能階層に従って出される。

(2月14日)

本家分家は主従関係を中心として行くものである。そこで家産の分割も本家優位である。それは政治構造と密接に関係する。

江戸時代幕府は公儀であった。又大名の家中の中にも別の公けと私がある。地方知行の残っている所では公領と私領の明らかなちがいがある。以上の如く義理と人情を追求すると結局、公けと私になる。

そしてこういうものはたゞ江戸時代のものであったとは考えられない。古い時代の記録を見ると奈良時代に既に公私があった。聖徳太子の憲法十五條に「背私向公 是臣之道矣」

岩崎本(平安初期の本)では私にそむき公けに向くとよんでいる。それ以前にはよみをつけたものはない。そこで奈良時代にもその様によんだものと思われる。当時祭政一致の為宮中と府中の別はなかったと思われる。

大化改新前に氏族の支配した土地人民に対して天皇の支配する人民を公民とよんだものと思われる。大化改新後、天皇は氏上に対して、公となった。

公けに対する奉仕は時代場所によってこととなった。中世の武士に於いては恩と奉仕は相務関係にあった。恩は主として地方知行であった。従って恩の深さで奉公の深さもきまった。

しかしそれはやはり平等の相互給付関係ではなくて上下的なものであった。家永という人は云う。奉公は窮局の目的をそれ自身にもたず自己の子孫一家の繁栄ということに目的があったのである。常にそうであったとはいえぬが(たとえば赤穂浪士)しかし、主従関係と家制度と結びついていることは確かである。先づ知行に従者の家の家産として認めたことを注目しなければならない。与える人が私領をどの様に考えていたか。

そこでそこには家の長い存続ということがどうして深く考えられて来たか。

家に扶養がたくせられ、それにも拘らず家が不安定だった古代のきびしい政治構造のもとでは家が人間を守る後のとりでとなっていた⁽²⁸⁾。

しかしこのとりでさえ十分に守ることが出来なかった。

それは、政治によって規定されたものでありその内部矛盾は、内部の人が防ぎ得ないほどのもので

あったが、又それ故に家を守って来たともいえる。家の万世の存続をすべての人が期待したがしかし現実の生活条件によって存続したものはその一部であった。

家族制度を規定している条件を考えねば家族制度をイデオロギッシュにいい悪いといっても何の役にも立たぬ⁽²⁹⁾。

義理恩の上位優先の根拠⁽³⁰⁾

下克上の風潮を見れば常に上位優先であったとも考えられない。徳川は何故、天皇を保存して来たか、そして天皇の勢力を圧縮して来たか。そして又徳川は源氏の姓を自分の祖先に入れたが、源氏の祖先は天皇から臣籍降下したものである為常に臣下という意識があった。かゝる上位優先は日本人の権威に対する態度に根拠がある様に思われる。

日本の神は西洋の god=super human でもないし中国の靈魂ともことなる。日本の神は人間的で、夫婦一族をもったもので勢力あるものは大きな力を持っていた。そこには上位下位もあった(正一位大名神)。神は集団の守護神としての基本的性格をもっていた。それは一人の司祭がまつりをし、己を空しくしてひたすら神意に仰向して人々の罪やけがれをみそぎ払いによって払いのけようとした。この様にまつる時の仰向的な心情は権威主義に通ずるものである。日本社会の基本的部分をしめていた守護神信仰には、罪、社会愛、ざんげなどと相反するものである。ともかくこの様な仰向的精神から上位優先の原理が出て来た。この態度は外国文化に対する態度ともなって来た。しかし、この心的態度の為にすぐれた文化を作って来た。又、権威主義で日本の心的態度で全部割り切ってしまうことも出来ない。ヒューマニズム、罪、社会愛に対する対決は西洋ほどのきびしさはないにせよ、決してないものとはいわれない。

義理は日本の家の社会関係を規定するものである。それは上位者の下位者を威圧するものではない。上下、平等、個人間、家間、多人数間すべての中に働いている。個人の規範はその社会規範に順応したり対立したりしている。生活規範の具体的内容を捕える為⁽³¹⁾には民族の性格、時代的地方的個性の差異を捕えることは出来よう。基礎構造として考える時は個と全との関係でもって捕えねばならない。それは動的なもので生活規範としても固定したものとして捕えることは出来ない。故に義理の関係の中で上下的なものだけを封建的なもの平等的なものだけ

を民主的ということは出来ない。

つまりそれぞれの時代の個性に規定されているのであるから平等のものでも封建社会にある時はやはり封建的なものに規定されている。

上下、平等は類概念で封建的とは歴史概念であり、両者がしばしば混同される。かくて義理の関係は上下も平等もすべて封建的と簡単に規定されてしまっている。

特定の義理は強制力を失ってしまっている。義理の中に封建社会の生活規範としての内容をあてるとそれはたしかに失われて来ている。

そして新しい生活規範が生まれつゝある。

封建的な意味の生活規範とは何か。それは封建的政治に規定されたものであると簡単にいえるが具体的にその内容を考察して行くことはむづかしい。

封建社会においては下位者が上位者に対して無限のおい目服従を規定されているが、それは古代においても見られるのではないか。古代の武人でもたしかに見られた。原始的無階級社会を除くと階層階級があらわれて来ると上の事実は見られて来ている様である。従って無限の負目を得るということは封建社会においてはじめて発生したものかどうかは疑問である。

封建社会において親に従うことは孝であり、それは義理の一種でそこでは家の秩序への絶対服従を強制せられそれに従わない考えは私情と考えられた。

その場合親に対する義理は公けを意味する。家長は公けであり、個人個人は私の面である。家長が武士として、領主と主従関係を結ぶ時個人のみならず家のものすべてが主人の家族に対して従うの立場に立った。家長は家を代表する故彼自身の個性的表現も制限された。つまり家の成員は家の公け（義理）に服従しなければならなかった。家長は家を代表する故、家長に仕えることが家の公けとなる。こうして家長は個人と家との間に区別がつきがなくなる。孝の内容も私をなくして公けに仕える滅私奉公の一つの型である。

家の存続に奉仕する義務が最高の道德。ここから直系〔嫡系〕と傍系の区別が生じて来る。又同家格婚なども生ずるし、私の婚姻も制限される。

主人の家の家格は石高でも比較的低くても、主従関係は奉公に結びつく。従者は公けである主人に対して私をなくして私なしに仕える時に忠僕として考えられる。主人への奉公は義理である。これは忠であるが先に述べた孝と内容は同じものである。封建社会には公けは何階層かに存在していた。私も同じ

主公 - 従私

|| 私
主 - 従
公 ||

主 - 従
公 私

く何階層かゝあった。そこでその階層間の相互関係を究明することが大切である。先づ上下関係がはっきりしている場合。

階層の下の方には上の階層に対しては私となる。

従ってこの場合にはどれを大切にするかをいえば上の公けほど大切にされる。〔上位優先の原則〕

そして公けは義理で私は人情となる。どの主従関係も私なく奉公することが忠である。主従関係は一つの集団として見られる（社会関係とも考えられる）。そしてその代表者はその集団の公けを示すと考えられる。そしてその集団は各人の個性を全然認めない。この公けは個性を基礎にして個性を越える公共の意味ではない。個々の集団ごとに異なる公けがある。

そして下の公けは上位の公けに支配される。そこでこれは封建社会の政治組織と密接な関係にあった。

これとことなる平等な関係の場合、この場合は農村などにしばしば見られる。

この場合に平等な講や組が沢山出て来る。個人関係でも平等なものも出て来る。講が平等な場合が出現するのは、頭屋（＝当番）を輪番につとめるという型にあらわれる。しかし平等だからといって民主的とはいえない。それぞれに属する家の力が均衡している場合である。講の祭祀には家を代表する家長が参加した。しかしその場合家族全体が参加したという意味にあるわけである。各家の家長が頭屋になった時だけは講の公けとなりその他の私は公けに奉仕する。しかしその場合、頭屋は輪番だから特定の家に対する主従関係は生じない。集団が大きくなった時特定の家（単数とは限らない）が特権的な宮座を構成して、それを通して祭が行われる場合がある。それは総氏子組織とはことなる。後者の場合でも氏子総代が、特定の家に集中する時と輪番的な場合がある。この場合も氏子総代が祭司することにより他の氏子も参加するのであり宮座とその意味内容は似ている。その際、氏子総代宮座は公けであり、個々を十分認めていたのではない。こうして、この様な平等な関係においても個性を抑圧する封建的な

ものによって規定されていた。輪番的に庄屋名主⁽³²⁾を選ぶ平等的集団も全体としては藩主に従属し、村において公けだった村役人は、ここでは私となる。そこで沢山存在する公けの上下の階層を決定する基準は封建社会を規定する政治的関係である。義理の関係は⁽³³⁾ 根幹となる主従関係に集中的に表現された。かゝる基本的な主従関係は武家社会にありその他の庶民は附随的な主従関係を構成して共同体生活をいとなんだ。

武士の主従関係は何階層に構成されても明白に区別される。しかし武士とその他の農工商との階層ははっきりしない。士と庶民との間には村役人町役人が媒介として存在する。(村役人町役人は地方の官僚である。)

村役人町役人は名字帯刀を許されて領主につながる。しかしそれは他面庶民の身分を持って被支配者のグループに属する。

公けの階層序列があったとしても下の階層の公けが社会的意義が小さいということは出来ない。そこで最下位の家内部の親子関係は全社会に規定されると同時に、逆規定をもした。それは封建的な政治機構を支える基盤として存在していた。家制度が主従関係を規定する事実を明確にするには武士の家中にあらわれた同族団を考えて見なければならぬ。本家分家は血縁とのみ考えられない政治構造と結びつけて考えねばならない。

注

- (1) 「三子」は意味不明であり、聞き取りミスと思われる。しかし5行後にも、20頁左欄20行目にも「三子」があり、跡継ぎをさす言葉として、「さんし」と聞き取ったことも事実らしい。
- (2) この箇所に「未開民族の養子 Linton」との高橋による書き込みあり。これは R.Linton, *Study of Man* に adopt の概念があることを連想した高橋の書き込みである。
- (3) 日本人文科学会編、有斐閣、1951年刊。
- (4) この箇所に「自然とは動物的集団ではない。」という高橋による書き込みあり。
- (5) この箇所に「しかし条件の進化によって形態はかわる 高橋。」という高橋による書き込みあり。
- (6) この箇所に「家の為に作り上げたという見解はおかしい？」という高橋による書き込みあり。
- (7) この箇所の左側に、高橋による二重丸(◎)の書き込みあり。
- (8) 同上。

- (9) この箇所の右側に、高橋による二重丸(◎)と「重」の書き込みあり。また、この箇所から下部欄外まで、左側に縦線が長く引かれ、「有賀の如くこの説明方法を一方的にすて切れるか。心理的説明方法意味づけの現象も考えるべき」という高橋による書き込みあり。
- (10) 傍点は、実際は文字の下部につけられている。以下の傍点も同様。
- (11) このパラグラフの上部欄外に「本分家関係を制約するもの 多くの生活条件、もっとも重要なもの」という高橋による書き込みあり。
- (12) この箇所に高橋による「◎ 重要」という書き込みあり。
- (13) この下線が引かれた箇所の左側に高橋による「重要」という書き込みあり。
- (14) この箇所は、「主婦」の文字が消されている。
- (15) この箇所の左側に、高橋による二重丸(◎)の書き込みあり。
- (16) この箇所から「三子」にかけて、高橋による矢印の書き込みあり。
- (17) この文章の左側に二重縦線が引かれている。
- (18) この下線が引かれた箇所の左側に縦線が引かれ、高橋による「自己撞着しないか これは喜多野説と同じだ」という書き込みあり。
- (19) この下線への注釈として、高橋による「これは同統意識ではあっても同族団ではない？」という書き込みあり。
- (20) この箇所への注釈として、高橋による「しかしこれらは同族団ではない。同統意識にすぎない。」という書き込みあり。
- (21) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みがあり、二重縦線が引かれている。
- (22) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みあり。
- (23) この文章の左側に二重縦線が引かれている。
- (24) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みがあり、縦線が引かれている。
- (25) この下線が引かれた箇所の左側に二重縦線が引かれ、上部欄外に高橋による「類概念は同一文化圏 同一種のもの間で設定」という書き込みあり。
- (26) 「領主と農民」の上部に線が引かれ、高橋による「代官が官僚として存在」という書き込みあり。
- (27) 「しの」は意味不明。
- (28) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みあり。
- (29) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みあり。
- (30) この文章の左側に、高橋による一重丸(○)の書き込みあり。
- (31) 「為」はノートでははっきり読めない。
- (32) この箇所から「村役人」の箇所まで、高橋による矢印の書き込みあり。
- (33) この箇所から「基本的な」の箇所まで、高橋による矢印の書き込みあり。